

週刊ダイヤモンド 今週の逸冊

北村行伸

平成19年5月7日号

「ファミリービジネス永続の戦略—同族経営だから成功する—」

デニス・ケニヨン、ジョン・L・ウォード(編著)

秋葉洋子(訳) 富樫直記(監訳)

ダイヤモンド社 2007年1月26日刊

戦後の日本の企業経営は終身雇用やメインバンク制度などの長期的契約関係に特徴づけられてきたが、過去10年の間に、成果主義や年俸制度、間接金融から直接金融へと向かい、企業価値の最大化を目指すアメリカ流の経営手法が受け入れつつあるという印象を与えてきた。そのような中、ライブドアなど、株式市場の期待をテコに増資による企業買収を繰り返して急成長を遂げた企業もてはやされた。

しかし、少し考えれば分かるように、消費者が必要不可欠とするような財やサービスの提供を独占的に行っているならともかく、同業他社が沢山いて、それほど特色もない企業を買収を伴う株価上昇によって急成長しているように見えても、そこには必ず限界が来るはずである。

このような経営と対極にあるのがファミリービジネスの世界である。ファミリービジネスとはファミリー構成員が経営に参加し、それを継承していくことを前提としている企業経営形態を指す。実際、日本に245万社ある企業の94%は同族企業で、上場企業でも4割はファミリー企業である。また、フォーチュン誌の選ぶ世界のトップ500のうち3分の1はファミリー企業であり、ヨーロッパ連合の総生産の3分の2はファミリー企業によるものであるとも言われている。

ファミリー企業の業績が他の企業に比べて優れている点として、(1)ファミリー企業は世代間のつながりを生かして多角化や垂直統合に積極的に取り組んでいること、(2)ファミリー企業はより長期的な戦略を持ち、負債は少なく、事業再投資率が高いこと、(3)ファミリー企業には実益をもたらす際だった企業文化があるということが挙げられている。

ファミリー企業は企業価値最大化に加えて、企業の継続も経営目標に入れている。この制約が企業経営に健全性や先見性をもたらしているようである。もちろん、ファミリー企業に問題が無いわけではない。同族経営の甘さが露呈した例もある。それらの問題を認めたとしても、ファミリービジネスは今後、ますます注目されるであろう。